

みやぎ復興つうしん

H24
9月号

発行

社会福祉法人 宮城県社会福祉協議会
宮城県災害・被災地協等復興支援ボランティアセンター
〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉1丁目2番3号 自治会館2F
TEL: 022-266-3952 FAX: 022-266-3953
URL: <http://msv3151.c-bosai.jp/>



宮城県社会福祉協議会

「被災地の地域福祉活動指針(ガイドライン)」の作成 ～明日へ向かって 災害に備えた社協へ～

指針作成の主旨は、宮城県社協及び各市町村社協の被災者(地)支援活動(災害ボランティアセンターの運営、被災者支援事業の運営、「地域福祉」事業の復旧等の業務)を振り返り、評価・反省を行い、現在被災している方々に対して、今後どのような対応・仕組みが必要か提案するものであります。

また、今後の大規模災害に備え、これまで社協が行ってきた災害対応の仕組・制度を再検討しながら、県内社協関係者の総意を得て、次につながる事業・提案を行っていくものであります。

指針策定にあたっては、県内市町村社協、学識経験者等から委員を選出し、検討委員会を設置することにしております。

委員会では、被災した方々が住み慣れた地域で「安心してくらす

こと」「自分らしい生活をおくること」ができるような地域社会を実現するため、関係者が今後行わなければならない施策を確認していくことにしており、来年の3月末までに取りまとめて、報告書を作成していく予定です。

なお、委員会の検討資料とするため、県内の35市町村社協を対象にアンケート調査を10月下旬までに行うこととしております。

ご多忙のところ各社協や関係者の皆様には、お手数をおかけいたしますが宜しくお願いいたします。

平成24年度 市町災害ボランティアセンター 活動状況

震災後1年半が経過し、これまで全国から52万人超のボランティアさんに活動をいただいております。

おかげさまで現在は、一部の被災地を除き収束の傾向にあり、平成24年4月から7月までの活動実績は、約4万5千人で昨年同時期の14.4%と減少してきております。

市町名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
		仙台市	石巻市	塩竈市	気仙沼市	名取市	多賀城市	岩沼市	東松島市	亘理町	山元町	七ヶ浜町	女川町	南三陸町	
受付 件数	自然・災害系	0	52	0	26	0	0	1	14	1	14	28	12	30	178
	生活支援系	0	4	0	47	7	14	90	3	7	11	26	99	1	309
派遣 区分 (件数)	自然・災害系	81	423	0	144	9	0	5	24	7	97	212	18	797	1,817
	生活支援系	105	7	8	98	751	32	150	11	41	78	208	108	132	1,729
派遣 人数	自然・災害系	525	2,676	0	529	30	0	15	116	41	1,958	13,317	258	17,355	36,820
	生活支援系	747	46	145	488	3,373	141	361	35	391	456	769	945	260	8,157
問合せ件数		0	2,095	0	207	207	98	169	101	1,282	999	3,770	384	3,593	12,905

column

あれから1年半・・・ 女川町で見かけた光景 (9月11日)

東 日本大震災で壊滅的被害を受けた女川町、あれから1年半。コバルトラインの分岐点手前にある“きぼうのかね商店街”。その中の奥まった所に「希望の鐘」があります。大津波によって女川駅前広場にあった時計台も駅とともにすべて流出しましたが、女川町の復興のシンボルとして見事によみがえりました。また、女川港沿いの熊野神社前の道路沿いには“とりもどそう笑顔あふれる女川町”の言葉に続き「笑顔と未来のギャラリー」があり、たくさんの子どもの絵が飾られています。みなさん、女川町を訪れてみませんか。



希望の鐘

被災地の取り組み みやぎ〜絆〜smile

亘理町

『わたしたちみんなが たがい
に支えあう りそうのまち』—『わ
たり』のキャッチフレーズが示すと
おり、住人同士が互いに支え合っ

ていける仕組みづくりを目指す亘理ささえあいセンター『ほっと』。町内5ヶ所1,126戸数ある仮設住宅の訪問やお茶のみサロンの展開に加え、みなし仮設住宅への支援活動も始まっている。

「震災からまだ1年半しか経っていない。それでも、被災者の間では明確な意識の差が浮き彫りになっている」とは復興支援コーディネーターの佐藤さんと育村さん。津波被害に遭った人、無事だった人。仮設に一人暮らしの人、多人数暮らしの人。前向きに進める人、被災当時のまま立ち止まってしまう人……。たとえ同じような状況にあっても、抱えた思いはそれぞれ異なる。一人ひとりに合った支援のあり方を試行錯誤する日々だ。

そんななか、みなし仮設に住む親子を主な対象にした「夏休み

日帰りバスツアー」を企画。福島県から避難している4世帯も参加して、山形県のリナ・ワールドへ向かった。「バスに乗り込んだときの、こどもたちの第一声が忘れられません」。育村さんは笑顔を見せた。「『〇〇ちゃん、1年ぶり!!』転校して離ればなれになってしまっ、1年ぶりに再会したんです。それを聞いて、このツアーを企画して本当に良かったと思いました」。どうしても仮設住宅にかたよりがちな支援活動を、こういったかたちでみなし仮設向けに展開したのは初めて。ツアーは10月・11月にも開催が予定されている。

これから先、どんな亘理町にしていきたいか。育村さんは語る。「2年後、復興住宅が完成します。そこに移り住むことによって、いままで築いてきたコミュニティが壊れてしまわないか。絆をつなぎとめる役割でありたい。住みやすい生活の場をつくりたい。建物や町並みが元に戻るの、10年そこそこではきつと叶わない。人と人との関わり合いの面で、元の亘理町を取り戻したい」。

あの日から「まだ」1年半か、「もう」1年半か。記憶の薄れてゆく

スピードに、その差にとまどう人々に寄り添う、ささえあいセンターのスタッフたち。画一的な支援内容だけではフォローしきれない『意識の差』に向き合い、真摯に対応してゆくことが求められている。



夏休み日帰りバスツアー



地元大学生が協力したサロン活動

亘理ささえあいセンター「ほっと」

住所：亘理郡亘理町字旧館 60-7

TEL：0223-36-7559

七ヶ浜町

今年4月から始めた田んぼのガ
レキ拾いも9月に終了し、外作業
のボランティアニーズはほぼ収
束、生活支援へと移行している

七ヶ浜町社会福祉協議会。町内の在宅避難者や単身高齢世帯の見守り・サロン活動を継続するとともに、8月からみなし仮設住宅訪問も始まった。

「七ヶ浜の人は我慢強い。それだけに、焦りや不安を口に出さず耐えてしまう人がいる」。七ヶ浜町社協職員の渡邊さんと小野さんは、発災からこれまでに振り返る。「長引く仮設生活で、このまま七ヶ浜に残るかどうかが、家族内でも意見が分かれる。『なるようにしかならない』という半ば諦めのような声を聞いた時、胸が痛みます」。

そんな町民同士の関わりをつなぎとめられるような支援を目指す。栄養士と地元の郷土料理研究家が指導する「食の支援（料理

教室）」では、住居環境や家族形態の変化で調理の意欲を失わな
いようにとの目的がある。働く場を設けるため開かれた「きずな工
房」では、木工製品や小物、アクセサリーなどを制作、販売してい
る。いずれも交流の場づくりと、仮設から地域に戻ったとき、コミュ
ニティも同時に再建しやすい環境を整えることが、ひとつの大きな
ねらいとなっている。

外部との交流が盛んなことも、七ヶ浜の特徴だ。花洲浜地区の
高山は外国人避暑地として有名で、発災時大勢の外国人ボラ
ンティアが来てくれた。現在は社協とともに、新たな地域福祉事業
や文化交流に取り組んでいる。また、8月に起きた京都府宇治市
大雨水害の際、七ヶ浜のグループが社協のスタッフとして資材や人
材20~30名を派遣し、即戦力として支援に入った。その背景に
は、震災時に宇治市社協の職員を派遣していただいた経緯があ
り、お礼と恩返しの意味も兼ねて駆けつけたのだ。

「これまでたくさんの方に支えていただいた。社協スタッフとし

て、結んだつながりを有効に、交流活動をどんどん応援したい。そ
こで生まれた絆を、他地域に、未来に伝えてゆきたいと考えていま
す」。



きずな工房



食の支援料理教室

社会福祉法人七ヶ浜町社会福祉協議会

住所：宮城郡七ヶ浜町汐見台 7-8-153

TEL：022-349-7781

女川町

「先の見えないトンネルを、無
我夢中で走り続けてきた」。ボラ
ンティアコーディネーターの武石
さんは静かに話してくれた。「震

災から1年半、長かったのか短かったのかわからない。後ろを振り
返る余裕もなかった」。津波による甚大な被害に遭った女川町。災
害復旧ニーズはほぼ収束し、地域支援や環境整備（浜清掃など）
へと移行している。離島含む女川全域を8つのブロックに分け、そ
れぞれにサブセンターを設立。看護師などの専門員と生活支援相
談員を2名ずつ配置し、被災者の心身のケアにあたっている。また、
後方団体と各ブロックの自治会長が連携し、交流会やイベント
を企画立案。各エリアごとに役割を担ってもらうことで、「住民と一
緒に」という意識が生まれる。コミュニティを重視した生活支援が
展開されている。

仮設住宅は地域内30ヶ所あるほか、隣の石巻にも約230世帯

が暮らす。住宅を建てられる場所がほとんど失われてしまったため
だ。「町の大きな問題のひとつに、住居の問題がある」とは事務局
長の佐々木さん。「居住、雇用の場が失われるとともに、教育環境
にも大きく影響を及ぼした結果、人口流出が深刻化している。女
川に残りたい気持ちはあっても、現実には難しい。今後の町のビジョ
ンを静観している段階です」。

山積みの課題を、とにかくこなすことで精一杯だった女川町復
興支援センター。しかしつい先日、武石さんにはようやく一息つけ
た瞬間があった。「2週間くらい前に来て話をした全社協の方か
ら、お菓子和メッセージをいただいたんです。『ねばり強い支援をし
ていたことに感激した』と……。それを読んで、今日までがんばって
これた自分がいたことに気づきました。震災以降いただいた名刺
を改めて見直して、こんなにたくさんの方が女川に来てくれていた
んだと、そのことにも気づけました。心が折れてしまうときもあっ
たけれど、いま、ようやく振り返ることができたかなと思います」。

容易ではない復興への道、社協職員・センタースタッフとしての
使命。多くの重圧に耐えながら、それでも着実に歩みを進める。ね
ばり強く力強い女川町復興支援センターの姿勢がうかがえる、
佐々木さんと武石さんの話だった。



出島・寺間交流会



学生ボランティアによる車いすのメンテナンス

女川町復興支援センター

住所：牡鹿郡女川町桜ヶ丘 7-7

TEL：0225-25-4911

「短い任期のなか、目先の問題だけこ
なすのではなく、町や住民の数年後を見据えた
支援の仕方もあるのでは、と考えていま
す。外部からノウハウを取り込むことも大
事だけれど、もともと地域に根付いたコ
ミュニティや文化をないがしろにしては
いけない。住民と歩調を合わせた支援を心
がけています」。

最後に、ともに働く女川町社協スタッ
フや支援者に向けてメッセージをくれた。
「外部から来て感じたのが、みなさん本
当に強い使命感を持って働いている。すご
い、と率直に思いました。いろいろなもの
を失いながらも今日まで来たことを尊敬
しますし、日々、現場にてたくさんの方
を学ばせてもらって感謝しています」。

「先月でちょうど1年。去年は何もわ
らなかつたけれど、徐々に物事を見る視
点が変わってきているように思います。以
前までは『被災者』という勝手なイメージ
を持ってしまっていて、その人のありのま
まを見る事ができなかった。派遣されてか
らは少しずつ住民の方の顔が見えるよう
になり、その人自身と向き合うことを大
切にするようになった」。

また、支援者と被災地の距離感につ
いて、稲田さんなりの考えを語ってくれた。
「短い任期のなか、目先の問題だけこ
なすのではなく、町や住民の数年後を見据
えた支援の仕方もあるのでは、と考えていま
す。外部からノウハウを取り込むことも大
事だけれど、もともと地域に根付いたコ
ミュニティや文化をないがしろにしては
いけない。住民と歩調を合わせた支援を心
がけています」。

「こ
んな女川にしたい、という希望よ
り、女川に住む人たちが『こうな
りたい』『こうありたい』と思える気持ちを
引き出せる役になりたいです。同志社大で
社会福祉を学んでいた稲田さんは、去年8
月、恩師のすすめで宮城県社会福祉協議会
に勤務することになり、今年の4月からは
女川町社会福祉協議会に派遣されている。
主な業務内容は、生活支援相談員14名の活
動のフォロー、フィードバック。そのほか社
協の事業のサポートに携わっている。



Good Smile!

今月の「人」

女川町社会福祉協議会
事務職員（震災復興支援員）
稲田 耕太
（社会福祉士）